

鎌刃城跡のシンポジウムを開催します

[米原町]

平成10年度より発掘調査を実施しております鎌刃城跡からは石積み、枳形虎口、大形の礎石建物など従来の山城の常識をくつがえす遺構が検出され、戦国時代の最先端技術によって築城されていることが明らかになりました。

そこで、米原町教育委員会では鎌刃城跡の調査成果から、近江の戦国史を検証するシンポジウムを下記の要項で開催いたします。皆様ぜひともご参加下さい。

◎米原町歴史シンポジウム

『鎌刃城から見た近江の戦国時代』

日時 平成13年10月13日(土) 13時～
会場 米原町中央公民館大ホール
参加料 無料(先着500名)

プログラム

12:30 開場
13:00 オープニング 伊吹和太鼓グループ「四季」

第1部 記念講演会 13:30～14:45

「信長が重視した鎌刃城と近江戦国史」

小和田哲男氏(静岡大学教授)

スライド報告 14:45～15:05

「鎌刃城跡の発掘調査」

中井 均(米原町教育委員会)

第2部 討論 15:15～16:45

織田信長VS浅井長政 一城と合戦一

実況中継: 木戸雅寿氏(滋賀県安土城郭調査研究所)

織田軍: 加藤理文氏(静岡県埋蔵文化財調査研究所)

浅井軍: 太田浩司氏(市立長浜城歴史博物館)

立行司: 小和田哲男氏

●問い合わせ

米原町教育委員会 生涯学習課

TEL0749-52-6632 FAX0749-52-2242

情報BOX

◆米原町教育委員会では、文化財を所管しております社会教育課が、平成13年4月1日より生涯学習課と課名が変わりました。人事に変更はありません。

◆米原町教育委員会では、下記の文化財関係冊子を刊行しました。

『米原町の文化財』(500円)

『鎌刃城跡発掘調査概要報告書』

◎問い合わせ先

米原町教育委員会 生涯学習課 ☎0749-52-6632

◆近江町では、下記の埋蔵文化財報告書を刊行しました。『息長古墳群1』(近江町文化財調査報告書第20集)

*前方後円墳を核とした前期・中期・後期のコンパクトな古墳群。詳細分布調査の報告。

『近江町埋蔵文化財集報3』(第21集)

*平成7年度～11年度に実施した国庫補助事業の報告集。付図『近江町遺跡地図』

『近江町埋蔵文化財集報4』(第22集)

*礎遺跡第4次発掘調査収録。弥生前期の竪穴住居。古墳前期の銅剣・木製紡織具出土。

◎問い合わせ先

近江町はにわ館 ☎0749-52-5246

◆伊吹町立伊吹山文化資料館では下記の図書を刊行しました。

『常設展示案内 伊吹山麓の自然と文化』(700円)

*伊吹の歴史と自然の入門書として最適です。

『伊吹山文化資料館年報3』(平成12年度)

*学社連携に関する論考も掲載しています。

◎問い合わせ先

伊吹山文化資料館 ☎0749-58-0252

◆◆編集後記◆◆

今年も発行できました。『佐加太』第14号です▲あいかわらず伊吹町が編集局です▲昨今、市町村合併に向けた検討が盛んです▲県が提示している案は北近江1市12町▲坂田郡では米原町が東近江との合併も視野に入れて検討されているようです▲文化財部会でも広域行政的な対応、各町の博物館的施設のあり方など課題が山盛りです▲でも、個人的に気になることのひとつに「地名」があります▲明治以来二度の大合併で古代・中世からの地名が消えていきました▲複数の町の一字づつの合成地名、「西〇△市」など位置を表す地名…▲伝統地名を残す努力をしたいものです▲我々も文化財部会や本紙の発行で広域的な文化財行政の姿を探っていきたいと思えます▲でもとりあえず今は、「坂田はひとつ」(ジャンギリッ子)

坂田郡文化財ニュース

佐加太 第14号

発行 平成13年8月31日

編集 坂田郡社会教育研究会文化財部会

事務局 〒521-0314 滋賀県坂田郡伊吹町春照37

伊吹町教育委員会生涯学習課

TEL.0749(58)1121

印刷 立木印刷



佐加太とは、「和名抄」東急本の坂田郡の訓を引用しました。

第14号

2001年8月31日

滋賀県坂田郡社会教育研究会
文化財部会

まるごと柏原宿

[山東町]

柏原に往時の宿場の賑わいを。そんな思いが結集しつつある今の柏原の息吹を紹介します。

■柏原宿歴史館

柏原宿をメインテーマに、柏原宿関係資料の展示や町並み保存の拠点施設として開館してから、4年目を迎えることになりました。開館以来、施設ボランティアの「ふれあい友の会」との連携により運営し、展示など充実してきたところです。

そこで、来る10月30日(火)～11月25日(日)まで第8回企画展として「街道の看板」展を開催します。江戸時代道行く人々に多くのメッセージを送った看板や葉袋の版木等を通して街道の広告史を垣間見ようと思えます。“コマーシャルソング”の元祖6代目松浦七兵衛を輩出した柏原宿を中心に、近隣の宿場に伝わる看板などを紹介します。

■町並み保存

平成9年のナショナルトラスト調査や柏原宿歴史館の開館を契機に、町並み保存の気運が高まりを見せはじめています。柏原宿歴史館の国登録文化財の登録“コマーシャルソング”の元祖6代目松浦七兵衛を輩

出し、今なお唯一文を商う松浦家住宅(亀屋左京商店)の町文化財指定、明治時代設立の旧柏原銀行建物の保存などの行政の動きと共に、やいと祭などを通じて町並み保存(自主的な修景など)やまちを元気付けようとする動きが出てきました。

現在、地域の人々と共に学習会や視察等を実施し、柏原の町並み保存について協議を重ねているところですが、その方向として国の「伝統的建造物群保存地区制度」を活用したいと考えています。

(桂田峰男)



▲やいと祭のにぎわい

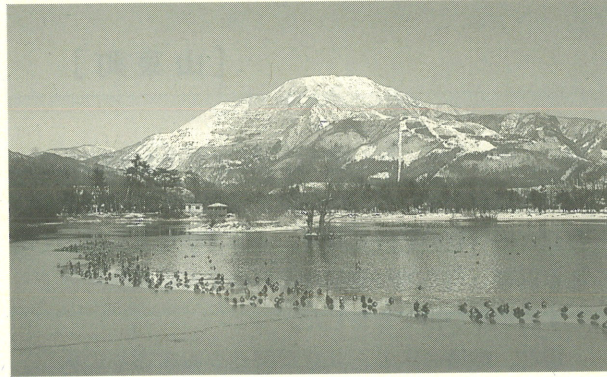
【県指定】三島池のカモ及びその生息地

[山東町]

マガモが生息します三島池は、山東町のほぼ中央に位置し、周囲約780mの南北に長い円形をしています。

元来、農業用水池として造られたといわれているこの三島池には、こんな伝説が残っています。

「その昔、佐々木秀義という代官がこの池を掘りましたが、水が出てこなかったので、占ったところ、女性を生き埋めにすれば水が出るというお告げがありました。



▲三島池とカモ

そこで、代官の乳母の比夜叉という女性が、はた織り機と共に地底に入ったところたちまち水が溢れ出て、年中絶えることのない水で毎年豊作が続いたのでした。」

今でも、深夜になるとはた織りの音が聞こえるといえます。また、池のほとりには比夜叉の墓があり、訪れる人が絶えません。

そんな伝説が残る三島池に、10月下旬頃シベリアから多くのマガモ達が訪れ、冬の風物詩となっています。

1957年(昭和32年)、地元大東中学校により冬の渡り鳥で、夏にシベリアで繁殖するマガモの自然繁殖が確認され、マガモ自然繁殖南限地として貴重な発見となりました。その結果、1959年(昭和34年)に滋賀県の天然記念物に指定されました。

現在、池の周辺にはマガモなどの生態が理解できる「三島池ビジターセンター」やキャンプ場など宿泊施設も完備した「グリーンパーク山東」が整備され、三島池を始め多くの人が訪れています。

(桂田峰男)

少年達の発掘調査 ～ひと夏の経験～

[米原町]

米原町では平成10年度より、町内の中世城館跡詳細分布調査の一環で、米原町番場に所在する町指定史跡鎌刃城跡の発掘調査を実施しています。現地の作業に従事していただいているのは地元番場の方々と、調査は例年、7～9月に実施しています。

一般的に発掘調査に携わる人のほとんどは『大人』で占められており、子供達が発掘調査に関わる機会は、一部の学校や行政が主催する体験学習の時ぐらいでしょう。

そんな中であって鎌刃城跡の発掘調査現場には、学校が夏休み期間であることも相まって、地元の小中高生が年配の作業員さんと毎日のように現場で汗を流しています。人数はわずか4～5人ですが、彼らは決して強制されて来ているわけではなく、極めて自主的に参加しているのです。猛暑の中であってクーラーも扇風機もない屋外での作業は大人でもこたえますが、大人と同じ作業内容をこなしている彼らを見ると、しんどいことや汚れることを敬遠しがちである最近の子供達の傾向との違いを感じます。これが、都市部と農村部という彼らを取

り巻く普段の生活環境の違いによるものなのか、彼ら固有の特性なのかはわかりません。

最初はこういったことに興味を示さなかった彼らも、遺構や遺物を発見するたびに徐々に興味を増していきます。小さな土器の破片に目を輝かせながら一喜一憂している彼らを見てると、こうした些細なひと夏の経験が、郷土への愛着を持つきっかけになってくれたらと密かに期待しています。

「何か出てきた!!」現場には今日も彼らの元気な声こだましています。

(土井一行)



▶夢中で掘り続ける少年達

碇遺跡の木製紡織具

[近江町]

近江町宇賀野に所在する碇遺跡は、弥生時代から平安時代にいたる6時期の遺構が重なりあう複合遺跡です。なかでも第Ⅲ期に相当する古墳時代前期には、町内を流れる幅6～10m規模の大溝の一部が確認されており、この地域に大掛かりな灌漑水利が引かれていたことが知られています。

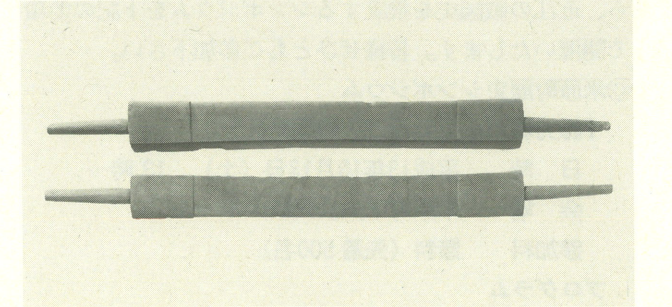
ここに紹介する木製紡織具は、同遺跡の第3次発掘調査の際に、大溝に注ぎこむ1条の溝状遺構から出土しました。2点1対の木製紡織具で、端部が凸形をした(A)と、凹形をした(B)から構成されます。

(A)は長さ63.8cm・幅5.4cm・厚さ16cmを測り、(B)は長さ63.6cm・幅4.7cm・厚さ16cmを測ります。材質は「イヌガヤ」と見られ、表面の一部には、本来全体を覆っていたと見られる赤色顔料が残されています。

これまでに、近江町内で確認されている古墳時代前期

の大溝遺構では、その隣接地の要所要所において「水辺の祭祀遺構」に関連する遺構や、小形銅鏡・木製傘骨・先端の折られた刀形木製品や銅剣・赤彩された土器などの遺物が確認されており、今回出土した木製紡織具も実生活に使用されたものではなく、水辺祭祀に関わりのある資料と推測されています。

(宮崎幹也)



▲木製紡織具(上がA, 下がB)

上平寺南館遺跡の石垣遺構

[伊吹町]

上平寺城跡遺跡群は、北近江の守護・京極高澄が15世紀末から16世紀前半に整備した城館跡で、近江と美濃の国境にそびえる伊吹山の南麓にあります。今回は、平成12年10月から12月にかけて実施した上平寺南館遺跡の発掘調査で、石垣遺構を発見したので紹介します。

ここでは、通称「カシュウ屋敷」と呼ばれ、『上平寺城絵図』には、京極氏の有力被官である若宮氏・加州氏・多賀氏・浅見氏・黒田氏・西野氏の屋敷区画が描かれています(本紙12号参照)。石垣遺構が出土したのは、若宮氏屋敷と推定している区画です。若宮氏は現在の近江町飯を本拠地にした武士です。

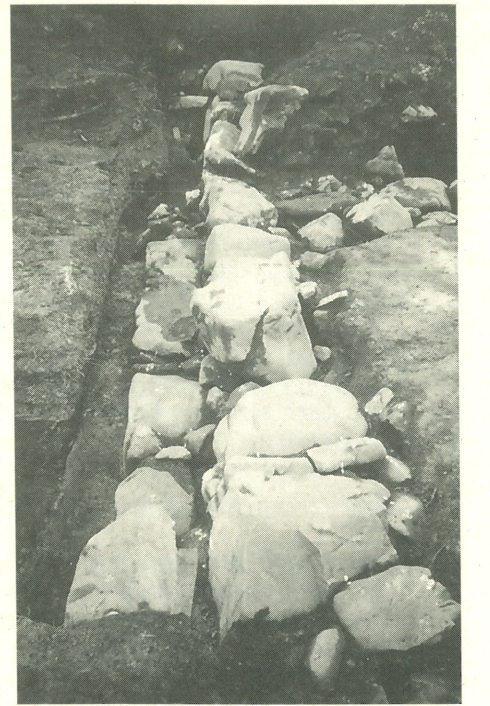
検出した石垣は、開墾により最高で三段しか残っておらず、大半は二段で石垣の基底部と考えられます。しかし、石垣の裏側に裏込め石を詰めていることや、角に立石を置くところなど明らかに石垣として築かれたものです。屋敷の内部にあることから建物を区画する築地の基礎と門部分の三～四段の石垣だったとみられます。

日本の城に石垣が用いられるのは、基本的に天正4年(1567)の安土城が始まりとされています。ただし、近江では守護大名・六角氏の観音寺城で1530年代中頃に採用されています。また、浅井氏の小谷城や鎌刃城でも出土しています。

こうした状況下で、今回京極氏の居城で石垣が発見された意義は大きく、家臣団屋敷を含む上平寺城下の廃城が大永三年(1523)と考えられ、石垣周辺から出土した土器もこの時代のもの

であることから、今回の石垣は城郭に用いられたものとして古いもので、北近江守護の京極氏の城館から発見されたことは、近江の城郭石垣の特殊性を示す資料のひとつになるものと考えられます。

(高橋順之)



▲出土した石垣